

P.15 左下 対応 Windows

Windows SP1 (64 ビット) → Windows7 SP1 (64 ビット)

P.17 右下

(Appendix1 参照) → (第7章参照)

P.18 写真2

MM-5101を組み合わせた様子. → MM-5102を組み合わせた様子.

P.20 左上 (補足)

パケット長は同期方式や状況により変化します.

P.20 写真4

MM-5101(内蔵 PLL 使用時) → MM-5102(内蔵 PLL 使用時)

P.20 図6

右下コンデンサの容量 2200pF (2箇所)

P21. 右下

実際には、いずれも表面実装品で5V動作のためレベル変換で扱いにくいです。以下のようなDIPタイプも便利です。→ これらは3.3V動作ですがいずれも表面実装品です。以下の部品はDIPタイプですが、5V動作のためレベル変換または5VのI/Oに接続する必要があります。

P.24 左中

第6章 → 第7章

P.26 リスト1左側 (詳細はダウンロードファイル I2S_ATT.vhd 参照)

```
if(Play = '1')then → if( (Play = '1') AND (IISCount(0) = '1') )then
when "1111001" => -- 1bit shift (-6dB) → when "1111110" => -- 1bit shift (-6dB)
when "1111010" => -- 1bit shift (-12dB) → when "1111101" => -- 1bit shift (-12dB)
```

P.26 リスト1右側 (詳細はダウンロードファイル I2S_ATT.vhd 参照)

SFT:process(reset, SCLK)中のif(Play = '0')thenのelse節を以下のように修正

```
if(Play = '0')then
  (中略)
else
  if(IISCount(7 downto 0) = X"07")then
    Shift24 <= buf24;
    iAddr<= iAddr + X"01";
  else
    if(IISCount(2 downto 0) = "111")then
      Shift24 <= Shift24(22 downto 0) & '0';
    end if;
  end if;
end if;
```

P.33 表 5 TxAddr のサイズ

9→10

P.33 表 5 TxBYTE のサイズ

10→8

P.34 リスト 3 及び リスト 4 一部削除

(a)

iRCV <= RCV; VP <= iVP; VM <= iVM; → iRCV <= RCV;

(b)

assign VP = iVP; → (削除)

assign VM = iVM; → (削除)

P.47 図 1

共有メモリ(RAM.vhd) → 共有メモリ(iRAM.qip)

24.576NMHz → 24.576MHz

P.49 図 5

コンフィグレーション・ディスクリプタ(CQ_CONFIG.vhd) → コンフィグレーション・ディスクリプタ(CQ_CONFIG.vhd)

P.52 右下

GET_INTERFACE ではインターフェース番号とオルタネイト番号の設定(変更)要求を処理します。

→ GET_INTERFACE ではインターフェース番号とオルタネイト番号の読み出し要求を処理します。

P.53 左下

ReqIF がアサートされます。 → ReqDEV がアサートされます。

P.53 右中

MaxLen には wLength に設定された値をセットするようにします。 → MaxLen には wLength に設定された値またはディスクリプタ全体の長さのどちらか小さい方の値をセットするようにします。

P.55 リスト 5 右下吹き出し

「アドレスがメモリ内部で 1 クロック遅れる分を調整」は 1 行上の「rd1 <= rd0;」を指す

P.61 リスト 13 右上吹き出し

Quartus Prime から認識される → Quartus Prime から認識される

P.61 右上

明示的に初期のためのリセット → 明示的に初期化のためのリセット